

香川県明善短大○秋山照子 長崎女子短大 大坪藤代

香川大教育 宮川金二郎

（目的） 封建制度の確立した江戸時代においては、朝鮮通信使に対しても、身分による格差を設けて迎接したが、饗応を行う沿道諸藩へも“膳部の次第”を通知して格差の統一を図った。通信使一行の9割近い人数（400名前後）を占める中官以下の饗応は4階層に分けられたが、これを分析することにより江戸時代の食事からみた身分格差、及び地域特性を明らかにする。

（方法） 宝暦信使に関する宗家記録より、中官・小童、通伺、下官、通伺下々の四段階の参向・下向及び朝・昼・晩に供された饗応料理428献立を分析した。

（結果）（1）全饗応献立は汁と菜の数、及び中酒肴の有無・品数などにより、最小の一汁三菜（四品）から最大の二汁九菜・吸物1品・肴2品（14品）までの、22パターンに分類することができる。（2）各段階の献立パターンの最小・最大パターンの中では中官・小童一汁五菜（下向・朝）～二汁八菜・吸物1品・肴2品（参向・晩）、通伺一汁五菜（下向・朝）～二汁五菜・肴2（参向・晩）、下官一汁四菜（下向・朝、昼）～一汁六菜・肴1品（参向・晩）、通伺下々一汁四菜となり、献立の格差は階級の他に参・下向の別、食事区分などによっても異なる。（3）献立上の身分の格差の要因は、料理の品数を最大に中酒肴の有無及び品数、調理手法の難易によりつけられる。（4）献立の格差は、献立規模の拡大に比例して拡大する傾向が認められる。